

■ ニュージーランドの生活とそこからの学び—NZにくらしてみたら

上越教育大学大学院 吉澤 千夏

1. はじめに

2019年度後期の半年間、サバティカルを取得し、ニュージーランド（以後、NZと表記）に滞在する機会を得ました。子どもの頃から、何故かNZに対して強い親しみを感じており、いつかは訪れてみたい国の1つとして、ずっと私の胸の内に存在していました。そして実際に複数回の短期滞在を経て、ここで勉強してみたい、生活してみたい、という気持ちが強くなっていきました。加えて、NZは私の研究分野である保育学・児童学の視点から非常に興味深いところでもあります。どうにかして、NZに長期滞在する方法はないだろうか、と考えていたところ、思いついたのが大学のサバティカル制度を利用することでした。私の所属する上越教育大学では、一定以上の勤務期間の後、3ヶ月または6ヶ月間のサバティカルを取得することが認められており、毎年数名の教員が国内外でそれぞれの興味関心に応じた取り組みをしています。それを利用して、思い切ってNZに住んでしまおうと思い立ち、指導する学生の状況なども考慮して、2018年に申請し、翌2019年のサバティカル取得が承認されました。そこからは、授業の調整やゼミの学生への説明、NZでの滞在方法やビザの申請など、思っていたよりも様々なことをこなしながら、NZ渡航への準備をすすめました。

渡航当日、空港の搭乗口はいつも以上の熱気に包まれていました。それもそのはず、その頃、ラグビーワールドカップが日本で開催中。しかもアイルランドと日本の試合が行われている、まさにその時でした。試合は後半に入り、一進一退の状況からついに日本がトライとゴールで逆転。ちょうどその頃、搭乗が開始される時刻だったのですが、何故か搭乗時間が遅れるとのアナウンスが

ありました。いつもなら「まだ搭乗できないのか」と落胆するところですが、TV前に陣取る旅行者はみな、そんなことは気にもかけず、大声で声援を送り、観戦を続けていました。そして、PGで点を重ねた日本の勝利が決まった頃、ようやく搭乗が開始されました。旅行者の中には、日本からの渡航者はもちろん、おそらくワールドカップを観戦してNZに帰国すると思われる方々もたくさんいました。そんな中、皆で一体になって観戦し、勝利を喜ぶ熱い雰囲気を存分に味わい、飛行機に乗り込みました。

そんな幸先の良いスタートを切った私のNZ滞在でしたが、実際にNZにくらしてみると、短期滞在ではなかなかわからなかった様々な気付きに出会うことができました。それは、保育学・児童学はもちろん、家政学の視点から捉えても、非常に興味深いものでした。そこで本稿では、私が半年のNZでのくらしの中で気づき、得ることのできた様々なコト・モノ・ひとについて、記したいと思います。

2. ニュージーランドとはどのような国なのか

皆さんは“NZ”と聞いて、どのようなことをイメージされるでしょうか。羊、キウイフルーツ（NZでキウイ(Kiwi)はNZ人を意味することが多く、果物のキウイはキウイフルーツ、鳥のキウイはキウイバードと呼ばれます）、それとも近年、日本でも盛り上がりを見せるラグビーでしょうか。そのいずれもが、NZを表すキーワードの1つといえます。しかし、それだけでは語りつくせない様々な顔を持つのがNZです。

NZの国土面積は日本の3/4程で、地形も日本の北海道と本州のような形の北島と南島の2つの大きな島とその周辺の多数の島で構成されています¹⁾。そこに日本の人口のおよそ1/20程度、504万人がくらしています²⁾。民族的な内訳は、欧州系（70.2%）、マオリ系（16.5%）、太平洋島嶼国系（8.1%）、アジア系（15.1%）、その他（2.7%）ですが、民族的なアイデンティティを複数持つ方も多く、%を合計すると100%を超えます³⁾。実際、私

Chinatsu YOSHIZAWA

上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授

〔著者紹介〕(略歴) 兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科単位取得満期退学。博士(学校教育学)。足利短期大学幼児教育科、文京学院大学人間学部を経て、2010年より現職。

〔専門分野〕保育学・児童学。

が大半を過ごした NZ 最大の都市であるオークランドでは、実に多様な方々が生活している様子を肌で感じることができ、「私は今、どこにいるのだろうか」と思うときさえありました。共通言語は英語、マオリ語、NZ 手話であり、多くの人が英語を用いたコミュニケーションを行います⁴⁾。その英語も、上記のように多様な方々の住む国ですので、実に多彩なものでした。おかげで私の拙い英語であっても、街の人たちはそれを理解しようという姿勢をみせて、実際に忍耐強く聞き取ってくださいました。むしろ、それぞれが「自分の英語を使ってこの国で生きていく」という強い気概さえ感じられ、それが私にとっては心地よいことの1つでもありました。

一方で、住む人それぞれの文化も非常に大切にされています。NZ の先住民族であるマオリの言葉は、地名や挨拶など、街の至るところで用いられており、例えばオークランドでは、市内を走るバスや電車内のアナウンスでも英語と併用して採用されています。また、TV にはマオリ語のチャンネルもあり、街の書店にはマオリ語の本も当然のように販売されています。また、多くの移民を受け入れている NZ には、極めて多様な人種・民族の方々がくらしています。私を受け入れてくださったホストファミリーも例外ではなく、ホストファザーはイギリス出身、ホストマザーは日系アメリカ人で、住まいの周辺には中国、インド、ロシア等、様々なバックグラウンドを持つ方がお住まいでした。また、とても社交的なホストファミリーのおかげで、本当に国際色豊かな出来事に度々遭遇し、それを身をもって体験することができました。

このようなそれぞれの持つ文化を大事にしようとする思想は、この国のジェンダーや LGBTQ への施策にも表れています。最近発表されたジェンダーギャップ指数では、日本は第120位と過去最低を記録した昨年（2020年）の121位とほぼ同水準であり、G7内では最下位だったのに対し、NZ は第4位となっています⁵⁾。また、NZ は2013年に同性婚を認めており⁶⁾、その法案の最終審議と採決の際になされた Maurice Williamson 議員のユーモアあふれるスピーチは一時、大変な話題となったことを覚えていらっしゃる方も多いでしょう。このような NZ の姿は、ニュースの素材としてだけでなく、実際の生活の中でも度々出会い、体験することができました。例えば学校の先生、隣で食事をしている家族、美術館を訪れていたカップル。ただ何気なくそこにいる方々が、様々な背景を持っていることに、始めこそ感慨深く見つめていた私でしたが、後にそれはとても自然であたりまえのこととして私の目前に存在していました。むしろ、そういった事ごとにハッとする自分こそが、多様性を本質的に理解し、受け入れていなかったのかもしれないと痛感させら

れました。

また、NZ は親日国としても知られています。NZ にとって日本は第1位の姉妹都市提携先であり、日本から見ると、NZ は8番目に姉妹都市が多い国となっています⁷⁾。今回の滞在中ではありませんが、バス停で時刻を調べていると、「お困りですか？」と声をかけてくれた NZ の高校生がおり、びっくりしたことがあります。聞けば、学校で日本語の勉強をしているとのことでした。近年では、様々な状況が影響し、日本語よりも中国語が人気だと聞いて、少々寂しく思う側面もありますが、私が大好きな NZ が、日本に関心を持ってきていることは非常にうれしいことです。

3. NZ の食

NZ はコモンウェルス（Commonwealth of Nations）の加盟国の1つであり、イギリスの影響を大きく受けているといわれています。私が滞在中も、イギリスのチャールズ皇太子とカミラ夫人が NZ を訪れ、大きな話題となっていました⁸⁾。そういった事情から、食文化においてもイギリスの影響を受けている側面があります。例えば、イギリスを代表する食といえば、フィッシュ・アンド・チップスが有名ですが、NZ の様々なお店やレストランでも食することができます。これまでの複数の滞在中で、何度も味わってきましたが、今回、人生史上最高のフィッシュ・アンド・チップスに出会うことができました。それはほぼ毎週金曜日の夜、ホストファザーの作ってくれたフィッシュ・アンド・チップスです。イギリスを訪れた際にも、何軒かの有名店に立ち寄りましたが、それを超越する美味しさに「これが世界で一番おいしい！」と思わずつぶやいたところ、ホストファザーはそのことをとても喜んでくれました。その後、ホームパーティで様々なお客様がいらっしや、フィッシュ・アンド・チップスを振舞うたびに、「千夏が世界で一番おいしいといってくれたんだ」と嬉しそうに話していました。また、イギリス出身のホストファザーの休日の朝は、ミルクティとトースト、卵、ハムやベーコン、ビーンズなどで始まります。いかにもイギリスの朝食の雰囲気ですが、一方でホストマザーの朝食は、魚の漬けをのせたお茶漬けで始まります。まず、前日のフィッシュ・アンド・チップスを作る際に切り落とした魚の切り身を醤油に一晩漬けこみます。それを翌朝、炊き立てのご飯にのせ、ティーバッグの緑茶を入れ、お湯をかけ、レンジで軽く温めます。とても簡単なレシピなのですが、これが驚くほどおいしいのです。ホストマザーは日系アメリカ人で、アメリカに渡った一世であるお祖母さまから様々な日本文化を学んだそうです。そのため、日常的な食事にもご飯やみそ汁が供されることが度々ありました。その一方

で、ハワイ生まれ・育ちのロコガールであるホストマザーは、ハンバーガーやピザも大好き。夕飯にオリジナルのバーガーを作って齧り付く、といったこともありました。他にも、ホストファザーが度々作ってくれたマッシュポテトは非常に美味で、それを使って作るシェパードパイ、ホストマザーの作るそうめんサラダやワンタン、本当にどれも絶品でした。このように、わがホームステイの食はかなりバラエティに富んでいましたが、それに加えて、ご近所の方から本格的な餃子や饅頭をいただいたり、ホストファミリーの友人がカレーをもって訪ねてきたり、キムチやキムパが届けられることもありました。そのどれもが本当においしく、NZに滞在したたった半年の間に、多種多様な食文化を体験することができました。

一方で、NZ料理というのはどのようなものか、というところとマオリの伝統料理といわれるハンギがあります。これは様々な食材を葉に包み、地中で蒸し焼きにするという豪快な料理ですが、日常的な食というよりは、イベント等で体験できる食であり、私も実際には味わったことはありません。その代わりに、多くのNZ人はBBQが大好きで、夏の楽しみの1つとなっています。ビーチなどには自由に使えるBBQの装置があり、家族や友人と一緒に海辺で楽しむのです。また、ホームステイ先にも当然ながらBBQセットがあり、夏になるとほぼ毎週末、夕食はBBQ。炭を炊き、熱せられた網の上でNZ産ラム肉を焼き、それを庭で食す。暮れていく空を眺めながら、いただくラムの美味しいこと、本当に贅沢な時間でした。また、NZで一番食べたであろう食材は、ムール貝の一種で通称マッスルと呼ばれる貝です。これはNZでは非常にポピュラーな食材で、一般的なスーパーの魚介売り場にはたいていマッスルが山積みになっています。価格は1kgあたり5NZ\$（日本円では350円前後）程度とお手頃なもの魅力です。これをレストランなどでは、様々な香辛料等とともに蒸し煮して、マッスルポットに仕立てるのですが、家庭ではもっと簡単に、皿に放射線状に並べてレンジにかけるだけで出来上がりです。これにレモンを絞り、少量の醤油を垂らして食べると、天にも昇る気持ちになります。これもフィッシュ・アンド・チップスと並ぶ、金曜日の定番メニューで、他にホストマザーがきれいにスライスした刺身、サラダ、そしてNZワイン。NZの豊かな海や山の恵みを毎週末美味しくいただいていたのだな、と今更ながら思います。

また、NZは農業大国としても近年、日本でも知られるようになり、日本のスーパーマーケット等でも、NZ産の野菜や果物、チーズなどをよく目にするようになりました。中でも乳製品は、NZにとっては最大の輸出品の1つであり、国内生産のおよそ95%が輸出されているといったデータもあります⁹⁾。もちろん、国内での消費量

も多く、アイスクリームの一人当たりの消費量はオーストラリアに次いで世界第2位¹⁰⁾です。一人当たり15.5ℓということは、1ヶ月あたり1ℓ以上のアイスクリームを食べているということになります。当然、ステイ先でもデザートはアイスクリームが定番で、フルーツにアイス、ホストマザーが焼いたケーキやパイにアイス。每晚それを食べていたら大変なことになると思った私は、数回に1度に控えていましたが、今思えば、我慢しないで食べておけばよかったかもしれません。

4. NZの衣

日本は四季の美しさを愛で、それを悦びにするところがあります。移り行く季節を尊び、その季節ごとの植物を愛おしみ、旬の味に舌鼓を打ち、催しを楽しむ。NZにももちろん、四季はあります。夏は暑く、冬は寒い、のですが、実際には1日のうちの気温の変化や天候の変化が激しく、それを表して「1日に四季がある」などと評されます。私が滞在した10月から3月は、NZの季節でいえば春から夏、そして秋にかけての時期になります。様々な方から、夏はずいぶん暑かったのではないかといわれましたが、概してとても過ごしやすい気候でした。しかし、「1日に四季がある」NZ。毎朝7時には家を出発していた私には、夏場でさえも肌寒く、半袖のTシャツの上にカーディガンやスウェットを羽織って出かける毎日でした。それでもお昼頃になると気温が上昇し、汗ばんでくるので、いったん上着を脱ぎ、また帰宅する頃にはそれを羽織ります。また、私が滞在したオークランドでは、突然の雨も多く、その際のレインコート代わりに日本から持参した、雨風を通しにくい素材でできたパーカーをいつもバッグに忍ばせていました。この日本のブランドは世界各国に展開していますが、NZにはまだ店舗がありません。NZ滞在中にちょっとした服を購入したいと思ったときに、このブランドがあればすぐに買えたのに、と思ったことは一度や二度ではありませんでした。その一方で、ともに学んでいた世界中から集まる友人たちの中には、同ブランドの服を着ている方が多数おり、このブランドの世界的な評価の高さを改めて知ることにもなりました。

このようなNZの気候の下、半年を過ごしたわけですが、以前から噂に聞いていながら、実際に目にしたことがなかったある光景に度々遭遇しました。それは、「裸足」です。ここでいう裸足とは、靴下等を履いていないという意味ではなく、靴下も靴さえも履いていない状態を意味します。NZではこの裸足の状態で、街中を歩く人がいるというのです。今回の滞在以前はNZの冬の時期に訪れることが多かったため、どうやら遭遇して来なかったようなのですが（実際には、冬場にも裸足の人が

いるとのことですが)、今回初めて、裸足で歩く人たちに出会うことができました。初夏というにはまだ肌寒いある日、バス停でバスを待っていると、学校帰りらしい数名の子どもたちがやってきました。保育学・児童学を専門とする私にとって、子どもたちの会話は非常に興味深いため、ちょっと聞き耳を立てようとそちらの方にさりげなく近づいていくと、一人の女の子が裸足で立っているではありませんか。そのバス停は街の中心部からは少し離れた場所にあるとはいえ、様々なバスのハブになっており、たくさんの人が乗り降りする場所です。にもかかわらず、裸足の少女がいて、そのことに誰も驚いていないことにこちらが驚かされました。その興奮を帰宅後にホストファミリーに伝えると、お二人とも「それは普通のことだ」と驚きもせずに応えました。「NZには裸足で歩く人がある」という噂は本当だったのです。そしてその経験を皮切りに、私は多種多様な裸足の人に出会うこととなります。スーパーマーケットはもちろんのこと、オークランドの街の中心部でさえ、裸足で歩く人に何度も遭遇しました。それはときに、学校帰りの制服姿の子どもだったり、スーパーマーケットで買い物中の子ども連れのお父さんだったり。裸足で危なくないのだろうか、と思ったこともあるのですが、よく見ると道路は思った以上にキレイで、危険なゴミはほぼ落ちていません。NZは環境保護に対する意識が高く、例えばオークランドでは、The Auckland Waste Management and Minimisation Plan 2018¹¹⁾ が採択されており、これにより Zero Waste な街を目指しています。例えば、日本では有料化されているスーパーやコンビニでのビニール袋ですが、NZでは全面的に廃止され、買物にはバッグを持参するか、スーパー等で購入できるエコバッグを利用します。先のNZの食でも紹介したBBQ施設ですが、周辺にはゴミ箱がなく、不思議に思っていると、自分たちが持ってきたものは自分たちで持ち帰り、処分するのだと教えていただきました。また一般に、早朝の道路はゴミで散らかっているイメージがありますが、オークランドでそれを感じたことは一度もありませんでした。このような意識の高さが街をきれいに保つことにつながり、結果的に裸足で街を歩くことを可能にしているのかもしれない。

また、裸足で歩くことが可能な街のドレスコードは非常に緩やかです。もちろん、スーツを着て仕事に向かうビジネスパーソンも存在しますが、基本的にはみなカジュアルな装いです。今回の滞在中、私がそれなりに服装を気づかったのは、ホストファミリーの友人の誕生会に招かれたときとクリスマスパーティに参加したときだけでした。NZではほとんど衣料品を購入しなかった私ですが、その2つのイベントのために、前者にはワンピースを、後者には「クリスマスには赤いものを身に着

ける」とのアドバイスを受けて、赤いブラウスを手に入れました。それ以外の日は、ジーンズにTシャツ、それに羽織るものだけで半年を過ごしましたが、全く問題ありませんでした。きっと、ちょっとおしゃれな高級店に出かけるときには、さすがにこの服装はNGでしょうけれど、今回訪れた全てのお店で、上記の服装がダメ、といわれたことはありませんでした。

5. NZ の住

NZ 渡航前、NZ での滞在方法についてはずいぶん悩みました。せっかくだからNZで一人暮らしをしてみたい。しかし、長期滞在は初めて、慣れない状況下で勉強をしながら一人で生活するのは難しいのではないか。そもそも、英語をブラッシュアップすることを最大の目的とした滞在ならば、話せる相手が近くにいた方がいいのではないか。悩みに悩んだ挙句、以前から何度もお世話になっているエージェントに相談し、最初の2ヶ月をホームステイで過ごし、その後、フラットを探すことにしました。NZではいわゆる「一人暮らし」をする人はそれほど多くなく、特に若い人たちは数名で部屋をシェアするのが主流のようです。その理由としては、住宅の不足やそれに伴う住居費の高さが挙げられます¹²⁾。実際、学校で出会った友人たちに話を聞くと、滞在が長期になるほどフラットでのルームシェアをしている人が多く、未成年であったり、短期滞在であったりする場合には、ホームステイを選ぶ傾向にあるようでした。私が渡航して2ヶ月後の12月は、NZの大学では休みの期間になります。地方からオークランドにやってきた学生や留学生の多くは地元に戻っていくため、その間の数ヶ月間、部屋を貸し出すケースが多く、それをうまく利用して部屋を借りれば、生活必需品も揃っているし、生活がしやすいとのアドバイスをエージェントから受けました。それは名案だと思い、そのつもりでNZに向かいましたが、エージェントお墨付きのホームステイは居心地がすばらしく、結果的にはNZ滞在のほとんどをそのお宅でお世話になりました。今となってはフラットでの生活もしてみたかったなという思いもありつつ、実は滞在期間中、とてもハードな時間を過ごしており、それをどうにか乗り越えられたのはホストファミリーのおかげでした。そういう意味で、半年間のホームステイは、そのときの最善の選択だったと思います。

私のステイ先は、いわゆる住宅地の中にあり、時折、ホストマザーと散歩をしながら、「あの家がいいね」とか「こっちも素敵ね」等と住宅談義をしていました。また、住宅地の中には、売買や賃貸に出されている住宅も多く、その間取りや広さなどが記載された看板を数多くみかけました。しばらくすると、買い手や借り手が決まると

の印がつけられたり、改装工事が始まったりし、新しい人が住んでいる、といったこともありました。NZでは住宅価格が高騰傾向にあり、外国人による購入に一定の制限が設けられています¹³⁾。これにより、価格の上昇は一旦は落ち着いたものの、現在でも高水準にあるとのことです。にもかかわらず、NZでは日常的な住宅に加え、バッチと呼ばれる週末や休日を楽しむための別荘を購入する人が少なからずいると聞きました。日本で平均的な生活をする者としては、別荘と聞くと、とても自分の手の届くものではないなと感じるところですが、生活を楽しむNZ人にとっては、よりハードルの低いものなのかもしれません。

さらに、住居費のみならず、NZは電気料金も高いことで知られています。その理由として、原発を持たず、水力や風力などの自然エネルギーが供給電力において一定の割合を占めている¹⁴⁾ことが考えられます。また、その電気を使ってお湯を沸かし、お湯をタンクに溜め、それで家族全員がシャワーを浴びるので、シャワーの使用については多くのホームステイで注意されます。一般にシャワーの時間は5～10分で、等といわれることも。私はホストファミリーから直接いわれたことはありませんが、エージェントからはシャワー時間に気を付けるように度々いわれていました。また、NZの住宅には浴槽がないことが多く、あっても浴槽にお湯を溜めて入浴するということは滅多にありません。今回の滞在でも6ヶ月間、シャワーのみの生活でしたので、帰国し、自宅に到着して最初にしたことは、とにかく湯船に浸かること。このときほど、お風呂っていいなと思ったことはありませんでした。これが唯一、日本に帰ってきてよかったと思うことでした。

6. NZのひと

先にも述べたように、NZには多種多様な背景を持つ方々が多く住んでおり、そのそれぞれの背景を非常に大事にされています。その1つのきっかけであり、基礎になるのがワイタング条約(1840年)です。これは、NZの先住民であるマオリと英国君主の間で結ばれた条約で、これにより、マオリの文化を守ろうとする精神は現在に至るまで息づいています。厳密には、ワイタング条約の条文解釈について、英国とマオリの間には様々な違いがあり、これにより問題が生じることも少なくありません。しかし、それを乗り越えるために1975年にワイタング審判所が開設され、マオリの権利について審議がなされ、賠償もされています。さらに1987年にはマオリ語が公用語として認められ、様々な公共の場で用いられています。

このような思想は保育の場でも生かされています。NZの幼児教育のナショナルプログラムはテ・ファリキ (Te

Whāriki)¹⁵⁾と呼ばれますが、これはマオリ語で「織物」を意味します。また、このテ・ファリキは「Empowerment」「Holistic Development」「Family and Community」「Relationships」の4つの原則と「Well-being」「Belongings」「Contribution」「Communication」「Exploration」の5つの要素からなります。それをベースに、それぞれの子どもたちが自分の思うままに、自由に遊ぶことができる。それがNZの幼児教育の大きな特徴です。そして、それによって実現されていく子どもたちの育ちの姿を記録していくのが「ラーニング・ストーリー」と呼ばれる子ども一人ひとりの記録帳です¹⁶⁾。ここには先生や周囲の人たちが気付いた、一人ひとりの子どもの育ちの姿が記録され、誰でもみたいときにそれを閲覧することができますようになっていました。そしてその育ちとは、上記の4つの原則と5つの要素からなる理念を基に捉えられていきます。なかでも「Communication」は、子どもたちそれぞれの持つ文化や言語が生まれ守られること、そしてそれは自分以外の文化や言語を育み、守ることを意味しています¹⁷⁾。このように、NZでは幼児期の段階から、自分自身の背景を大事にするとともに、他者の文化をも大事にすることを学んでいきます。

一昨年のラグビーワールドカップにおいて、残念ながら準決勝で敗退してしまったオールブラックス (NZ代表チーム) ですが、彼らの試合外での振る舞いが地元の新報で取り上げられていました。いうまでもなく、オールブラックスは世界最高のラグビーチームであり、NZの誇りといっても過言ではありません。チームのメンバーはもちろんNZ代表チームですので、民族的な多様性が存在します。そして、その多様性は彼らの文化の多様性をも意味しており、その1つとしてタトゥーがあります。マオリにはタトゥー文化があり、その歴史は古く、マオリの肖像画等では顔にタトゥーが施されたものも多くあります。そういった意味で、タトゥーはNZ人にとっては馴染みのあるものであり、実際に街を歩いていると、大小様々なタトゥーをしている人を見かけます。それに対して日本では、タトゥーがタブーになる場面も多く、未だ一般的であるとはいえない状況があります。しかしこれもまた、日本の文化といえることができるでしょう。これについてNZ人の友人から、マオリにとって文化であり、誇りでもあるタトゥーをなぜ日本では隠さねばならないのか、と違和感を伝えられたのです。なぜかといえば、今回のワールドカップ中、オールブラックスのメンバーは試合以外の場面では、タトゥーを隠しているとの報道がなされたからです¹⁸⁾。私はこの報道を知るまで、そのような配慮を彼らがしていることに全く気付いていませんでした。そして私は、私の知る限りの日本におけるタトゥーに対する認識等について説明したのですが、

文化の多様性を受け入れている NZ 人には、不可解なこととして受け止められたようでした。

しかし、当のオールブラックスメンバーは、一体どのようにこのことを考えていたのでしょうか。その答えは同じ報道の中にありました。「自分たちは日本にいるのだから、日本のやり方や文化を受け入れる。」¹⁹⁾これがオールブラックスのメンバーのコメントです。このように自分たちの文化を大事にするとともに、他者の文化を尊重するという姿勢は、この国の至る所で触れることができます。このことは先にも述べた Maurice Williamson 議員のスピーチとそれを受け入れる議会、そして市民の姿に通じるものがあると思います。

7. NZ とコロナ

日本への帰国が迫ってきたころ、日本ではコロナウイルスに関するニュースが連日、テレビや新聞等で報道されていたようです。実は帰国直前に試験を控えていた私は、少しでも英語に触れる時間を増やそうと、日本からの情報にはあまり目を向けないようにしていました。しかし、NZ でも少しずつニュースとして扱われ始め、とうとう最初の感染者が確認されたのが 2 月 28 日²⁰⁾。さらにその後、少しずつ感染者数は増えていきました。それでも街中でマスクをしている人はほぼおらず、一部のアジア系の方のみがしているだけでした。私も帰国するまでは、ノーマスクで過ごしていました。しかし、NZ では TV や新聞等、様々なメディアを通じて、コロナウイルスを防ぐための対策を伝え続けました。例えば、相手とどのくらいの距離をとらねばならないか、自主隔離中の方や感染者と対応するときにはどうしたらよいか等、具体的な姿を提示し続けていく中で、NZ の人々の生活は変わっていきました。もともと非常に friendly な NZ の人たちですが、このコロナの世界的な感染拡大を機に、挨拶の仕方を握手やハグから前腕部や肘のタッチへと変えました。これはもともと、ニュースや新聞等でそのようなやり方が報道されたのをきっかけに、一種の流行のような感じで取り入れられたようですが、いいと思えばさっと新しい文化を受け入れ、自分たちの生活に生かすことができるのは NZ ならではの、と思ったのを覚えています。

その一方で、こういったときだからこそ、様々な問題も生じてきます。まだ NZ 国内でコロナ感染者が確認されていない 2 月初旬、アジア系の背景を持つと思われる医師が、バスの中で「中国へ帰れ」との言葉を投げかけられた、という出来事です²¹⁾。それは未知のウイルスへの恐怖からだったかもしれませんが、しかし、このような人種差別的な発言があったことに、私も大きなショックを受けました。もし、日本でこのような報道があったな

らば、発言した人が特定され、社会的に大きな制裁が与えられたことでしょう。それに対して NZ では、この発言について多くの人が nonsense だと声を上げ、その問題性を共有しながら、それ以上の大きな騒ぎになることはなかったように記憶しています。いけないことはいけないことだ、と自分の意見としてそれぞれが主張する一方で、自分と異なる意見を持つ者を必要以上に排除しない。これは多様な人を受け入れてきた NZ が持つ、一種の寛容さではないかと思います。

そして帰国直前に、エージェントからホームステイを代わってもらえないか、との連絡が入りました。3 月になると少しずつ NZ 国内でもコロナ感染者が増え始め、海外からの渡航者によるウイルスの持ち込みが指摘されていました。そのため NZ では、海外から国内へ入った場合、2 週間の自主隔離を行うようになり、それに伴い、日本からの留学生にも、同様の措置が求められるようになりました。しかし、そのとき渡航を予定していたのは、高校を卒業したばかりの未成年。しかも、初めての海外への渡航で、2 週間をたった一人でホテルで過ごすことは難しいとのことでした。その一方でこの時期、海外からの渡航者を到着まもなく受け入れてくれるホームステイ先を見つけるのは非常に困難で、唯一、私を受け入れてくださったお二人だけは、それでもいいといてくださっていたようでした。しかし、私も最後までお二人の元で過ごしたいという思いがあり、一度はお断りしました。その後、いよいよオークランドでの感染者が増え始め、いつ国境が閉鎖されてもおかしくない状況が迫っていました。そのため、最後の 1 週間を残して、およそ 6 ヶ月お世話になったお宅を離れることを選択し、ホテルでの一人暮らしをすることとなりました。そのときには、帰国前にもう一度泊りに行くことや食事に行く約束までし、軽い気持ちで「またね」とお別れしたのですが、それが実際にお目にかかれた最後になってしまいました。引越しの直後、高齢者の外出が制限され、ホストファミリーが外出できなくなりました。そして新しくホストファミリーが迎え入れた方も、2 週間は外出ができません。そのような状況下で私が遊びに行くことが非常に難しくなっていました。最後の最後、きちんとお目にかかってお礼のご挨拶をしたかったのに、それができなくなってしまったことへの無念は、今でも持ち続けています。あのとき、「また会える」と軽く考えていたことが、このような事態になるとは思いもしませんでした。

6 ヶ月の大半を勉強に費やしていたため、周囲からは「もっと楽しんだらいいのに」といわれていた私ですが、最後の 1 週間は友だちと食事に行ったり、NZ の原生林を歩くツアーに参加したり、イルカとクジラに会いに船に乗って海を漂ったり、存分にオークランドを満喫しま

した。そして無事に帰国した翌週、NZはロックダウンを決め、コロナとの長い闘いの日々に入りました。ここからのNZやJacinda Ardern首相の取り組みは、日本でも広く報道されていたので、ご存じの方も多と思います。国内全体での感染者数はまだ二桁の段階でのロックダウンは世界に衝撃を与えましたが、結果的にはそれが功を奏し、一度は感染者0の状態が100日以上続く状況に漕ぎつけました。しかしその後、再度、市中感染が確認され、再びロックダウン。現在は感染者数も落ち着きつつあるようです。

8. 終わりに

いろいろな方にお話をお聞きすると、サバティカル期間はあっという間に過ぎてしまった、とおっしゃる方が大半です。しかし、私のサバティカルは長いとも短いともいえず、ただとても苦しく辛かったというのが正直な感想です。それは、久々に真剣に学び、自分を追い込んだ証であると思っています。その一方で、NZを半年間の滞在場所を選んだことは間違いではありませんでした。子どもの頃から抱き続けてきたNZへの憧れは、今回の滞在を通じてより強く、深くなりました。衣・食・住、環境、子どもの育ちや家族、経済など、家政学の視点からNZの生活をみてみると、日本の生活を見つめ直したり、改善したりするためのヒントがたくさん詰まっているような気がしています。今回、お伝えしきれなかった様々なエピソードや気付きがまだまだたくさんあります。

次はいつ行けるのでしょうか。帰国から1年が経ち、未だにNZを訪ねられる兆しはみえてきませんが、いつかまたNZの地に降り立つ日のために、コツコツと力をつけていきたいと思います。そして次回こそは、NZの幼児教育をしっかりと学びに、NZに戻りたいと思っています。

最後になりましたが、サバティカルをご許可くださいました上越教育大学前学長 川崎直哉先生をはじめ、執行部の皆さま、そして快く送り出してくださいました家庭コースの先生方に心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 外務省. “大洋州：ニュージーランド”. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/index.htm> (閲覧 2021.3.31).
- 2) 前掲 1)
- 3) 前掲 1)
- 4) 前掲 1)
- 5) World Economic Forum. Global Gender Gap Report 2021. 2021, 10.
- 6) The Parliament of New Zealand. Marriage (Definition of Marriage) Amendment Bill. 2013.
- 7) 在ニュージーランド日本国大使館. “姉妹都市関係”. https://www.nz.emb-japan.go.jp/culture_education/relatedorgs_j.html (閲覧 2021.3.31).
- 8) NZ Herald. “Prince Charles and Camilla, the Duchess of Cornwall, arrive in New Zealand”. <https://www.nzherald.co.nz/nz/prince-charles-and-camilla-the-duchess-of-cornwall-arrive-in-new-zealand/L2JYK63UMVCT2OA5G-CHJEWVCE/> (閲覧 2021.3.31).
- 9) 農林水産省. “第3章 ニュージーランド農業の現状と農業・貿易政策”. 主要国の農業情報調査分析報告書(平成22年度). 2011, 103-164.
- 10) (一社)日本アイスクリーム協会. “世界各国の1人当り年間消費量”. <https://www.icecream.or.jp/biz/data/consumption.html> (閲覧 2021.3.31).
- 11) Auckland Council. Auckland Waste Management and Minimisation Plan 2018. 2018.
- 12) 日本貿易振興機構. “ニュージーランド、住宅価格は引き続き上昇”. <https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/01/5bfb1d76dc46057c.html> (閲覧 2021.3.31).
- 13) The Parliament of New Zealand. Overseas Investment Amendment Act 2018. 2018.
- 14) New Zealand Government. Energy in New Zealand 2020. 2020.
- 15) Ministry of Education, NZ. Te Whāriki. 1996.
- 16) Ministry of Education, NZ. “Assessment of Learning”. <https://tewhariki.tki.org.nz/en/assessment-for-learning/> (閲覧 2021.3.31).
- 17) 前掲 15)
- 18) NZ Herald. “Rugby World Cup 2019: All Blacks reveal special measures to respect Japanese culture”. <https://www.nzherald.co.nz/sport/rugby-world-cup-2019-all-blacks-reveal-special-measures-to-respect-japanese-culture/T3JC-5QZPPTL2UWPB6LPFHUXCFA/> (閲覧 2021.3.31).
- 19) 前掲 18)
- 20) Ministry of Health, NZ. “Single case of COVID-19 confirmed in New Zealand”. <https://www.health.govt.nz/news-media/media-releases/single-case-covid-19-confirmed-new-zealand> (閲覧 2021.3.31).
- 21) NZ Herald. “Coronavirus: Kiwi-born doctor told to ‘go back to China’ in Auckland bus incident”. <https://www.nzherald.co.nz/nz/coronavirus-kiwi-born-doctor-told-to-go-back-to-china-in-auckland-bus-incident/ZP2F4J2UL7GTN-4NER4HLASCDQA/> (閲覧 2021.3.31).